

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

英語

「単元を貫く問い」を核とした
アウトプット活動と自己調整学習で、
主体的な学びの実現を目指す

福岡県立筑紫丘高校

徳永拓也 とくなが・たくや

同校に赴任して6年目。キャリア教育課課長。
英語科。



学校概要

◎設立 1927(昭和2)年 ◎形態 全日制/普通科、理
数科/共学 ◎生徒数 1学年約440人

◎2024年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、
東京科学大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、
神戸大、広島大、九州大などに232人が合格。私立大は、
慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大、同志社大
などに延べ570人が合格。

私が
目指している
授業

昨年度の卒業生を担当した3年間は、生徒に学習時間を有効活用させ、自律的な学びを支援することに重点を置いてきました。2年次、3年次には小テストや課題を大幅に減らし、取り組むべき学習を生徒が自分で考え、選択できるよう、多様な内容・レベルの教材を用意しました。生徒は主体的に学習に取り組み、2025年度大学入学共通テストでは、「英語」のリーディングとリスニングの平均点がともに80点を超えました。25年度の1年次は、これまで通り大学入試での得点力の向上を目指しつつ、英語活用力を高めるアウトプット活動、中でもスピーキングを一層重視して授業を展開しています。

授業レポート

本時の概要

【対象】1年生 【教科・科目】外国語・英語コミュニケーションⅠ
 【単元】Chapter 7 Human Habitation on Mars
 【単元目標】宇宙開発の意義について考え、その是非を表現できる。
 【授業時数】全5時間のうちの3時間目
 【本時の目標】火星に住むことの可否について書かれた文章を読み、その内容をまとめたり、自分の意見を述べたりすることができる。



単元の指導計画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。 <https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/> または右の2次元コードからアクセスしてください。



ウェブサイトVIEWnext ONLINEでは、授業のダイジェストを動画で紹介！



1 単語テストとディスカッション ⌚ 10 分間



授業の冒頭は、5分間の単語テストの後、5分間のトリオディスカッション（*）に取り組んだ。単元を貫く問い「国は地球上の喫緊の課題（貧困、気候変動など）よりも宇宙開発を優先すべきか？」について、生徒は賛成・反対の立場から相互に質問を投げかけ、多角的に思考を深めていった。

2 教科書の重要事項の理解 ⌚ 20 分間

本時のキー課題



説明の時間を効率化するためにプロジェクターを2台使用。1台には教科書に掲載されている重要単語・表現を、もう1台には徳永先生の解説を表示した。説明の合間に生徒は解説された英語表現を使うペア活動に何度も取り組んだ。その後、事前課題のプリントの問題の答え合わせもペアで行った。

3 セルフスタディータイム ⌚ 10 分間

本時のキー課題



授業の後半は、生徒が自分に必要だと判断した学習に取り組む10分間の自己調整学習「セルフスタディータイム」を実施。リスニング、シャドーイング、単語テストの見直し、あるいは単元を貫く問いに関する追加の情報収集など、多様な活動が見られた。

4 サマリー&オピニオン ⌚ 10 分間



ペアになり、本時の内容について1人の生徒が要約を、もう1人の生徒が自分の考えを、それぞれ相手に説明した。その後、ワークシートに自分が話した内容と授業の振り返りを記入し、提出して授業は終了した。

* 上山晋平先生（福山市立福山中・高等学校）が考案した、基本は3人1組で3分間行う英語のディスカッション活動。

発問・課題設定の観点

英語の力と、

自分で学びを選択する力の両方を育みたい



生徒は本単元を通して、「国は地球上の喫緊の課題（貧困、気候変動など）よりも宇宙開発を優先すべきか？」という根源的な問いと向き合います。その過程の本時は、「火星に住むことは実現可能なのか」について、生徒は議論しました。そのように、すべての単元で、その単元を貫く問いを1つ設定し、各授業では、その問いについて多角的に考えられるよう、様々な視点でディスカッションを行うとともに、文法や表現の知識を身につけていきます。

トリオディスカッション、ペアワーク、サマリー&オピニオンと、様々なアウトプット活動を行います。が、どれも「単元を貫く問い」に関連させています。そして、10分間の自己調整学習においても、問いに対する現時点の自身の理解度と課題に応じて、取り組むべき最適な学習内容が何かを生徒は考え、選択し、そ

れに取り組めます。自分の課題と自分に必要な学びを考え、選択・実行できる力を生徒に育むことは、英語の力を育成することと並んで、授業全体を通じて大きな目標です。

自分に必要な学びを考え、選択できる力を身につけてほしいという私の思いは、特に年度当初、自分自身の高校生時代の経験や後悔も交えながら、繰り返し生徒に伝えました。課題や予習、小テストなどを大幅に減らしても生徒の学習時間は減らず、模擬試験などの成績も下がらなかったのは、生徒が主体的に学習に取り組んだ結果だと思っています。

25年度は、スピーキング力を丁寧に見取るために、「英語コミュニケーション（3単位）」のうち1時間をA・L・Tとのチーム・ティーチングにし、私は補佐的な立場で授業にかかわっています。発表やペア・グループでのやり取りにおける生徒の様子・姿勢を観察し、前向きに取り組んでいた場合は加点方式で「主体的に学習に取り組む態度」の評価に反映しています。今後もA・L・Tの力を借りながら、英語で話そうとする生徒の頑張りや流ちょうさなどの成長を丁寧に見取っていきたいと考えています。



毎回の授業で、学習内容の要約、自分の意見、授業の振り返りを書く。1コマの学習活動のすべてがこの時間につながっていく。

学習評価の工夫

授業に対する

生徒の思いに耳を傾け、

授業を改善していく



25年度は、スピーキング力を丁寧に見取るために、「英語コミュニケーション（3単位）」のうち1時間をA・L・Tとのチーム・ティーチングにし、私は補佐的な立場で授業にかかわっています。発表やペア・グループでのやり取りにおける生徒の様子・姿勢を観察し、前向きに取り組んでいた場合は加点方式で「主体的に学習に取り組む態度」の評価に反映しています。今後もA・L・Tの力を借りながら、英語で話そうとする生徒の頑張りや流ちょうさなどの成長を丁寧に見取っていきたいと考えています。

授業改善の材料となるのが、授業後と定期考査後などの節目に実施する授業アンケートです（図）。アウトプット活動に対して前向きに参加できているかどうかはもちろん、2台のプロジェクターを使った私の説明が、難関大学志望者が多い本校の

生徒のニーズに合っているかどうかを確認しています。「教科書で出てきた慣用表現を使って英文を作る時間を設けてほしい」など、生徒はいろいろな要望を出してくれるため、授業改善のヒントになっています。24年度の3年生が卒業する際に行ったアンケートでは、「課題や小テストが少なくても学力が伸びた」と答えた生徒が多く、授業満足度も100点満点で平均97点だったことが、今の自分の指導の自信になっています。

図 生徒の声を踏まえた授業改善の例

生徒の声	授業改善
「同義語・対義語をもっと紹介してほしい」	左側のスクリーンで関連語を繰り返し提示するようにした
「話す活動（音読の時間）を増やしてほしい」「英語コミュニケーションなのに会話の時間が少ない」	表現活動の時間を増やした
「終盤に詰め込みがちなので改善してほしい」「早口で聞き取りづらい時がある」	説明は前半に多めに配置するなど、話す速度や構成を意識して調整した

このほか、「黒板の特定の色が見づらい」「スクリーンの文字サイズが小さい」といった教師が気づきにくい指摘についても、徳永先生は生徒のニーズに合わせて授業を改善した。
※学校資料を基に編集部で作成。



3年間を見通した指導計画で主体的な学びを実現

「日々の学習のやらされ感をできる限り払拭し、生徒を主体的な学習者へと育てていくことが不可欠だ」。教師としてのキャリアを重ねる中でそんな思いが強くなっていた私は、23年度から参加している「若手教師・教育創造MTG＊」の中で、自己調整学習に取り組む全国の先生方の実践に出会いました。果敢に授業改善に取り組む仲間から刺激を受けたこともあって、私自身、24年度から授業の一部で生徒が、自分に取り組む学習を自分で選択する時間を設けています。

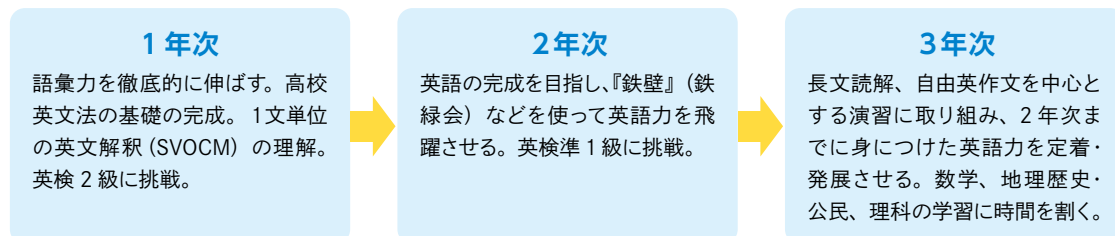
やらされ感のある学習から脱却するために必要なのは、生徒の「納得」と「選択」です。自分が学習すべきことを自分で考えることが、これからの社会を生きる上で重要だと生徒が納得し、自分に合った学習を自分で選択することを私たち教師が認め、支援することが大切です。また、生徒自身が3年間の英語学習を見通すことも不可欠です。どの時期に何をするのか、どんな状態を目指すのかというロードマップを生徒が意識して行動することが、毎時間の自己調整学習の充実を始めとする主体的な学びの実現には欠かせません。

私は生徒に「2年生で英語の完成を目指そう」といつも話しています。英語は上の学年に進級することを

待たずに早期に習得できる教科であり、3年次に英語以外の教科に時間をかけることができれば、難関大学の合格の可能性が高まると生徒に伝えていきます。また、「英語を完成させたら、3年次に全力で運動会のリーダーを務め、高校生活を満喫しよう」などと、高校生活の充実につながる声かけもしています。そして、各学年で何ができるようになることを目指すのか、そのために何を行うべきかを話しています。

1年次は、語彙、文法、リスニング、英文解釈など、基礎的なインプットを重視しなければなりません。同時に、学習の進め方や習慣といった「学び方」そのものを指導することも求められます。その中にある私も、アウトプット活動の時間を充実させたいと考え、その手段として、短時間で継続的に実施しやすい「トリオディスカッション」や「サマリー＆オピニオン」を導入しました。そのような授業中の活動の意味も、ロードマップを踏まえて生徒に丁寧に説明することで、生徒の学びが主体的になっていきます。生徒には私の意図が概ね伝わっているようで、「授業を通して英語の力がついている実感がある」「意味のある学習ができています」などと話してくれています。

■徳永先生の3年間の英語指導のロードマップのイメージ



成果と展望

インプット量を確保しつつ、アウトプット活動をさらに充実させたい



過去3年間は、模擬試験や大学入学共通テストの結果などに重きを置いて指導を行ってきました。今年度からはそれに加えて、日々の授業にスピーキング活動や自己調整学習を積極的に取り入れています。ペアやグループでのディスカッション、サマリー＆オピニオンなど、発話の機会を授業に多く取り入れています。授業アンケートの結果を見ると、生徒たちの反応は非常に良好です。発信するために知識を整理し、他者との対話を通じて新たな表現に触れる中で、アウトプットの過程でインプットも同時に深化・拡充できるといふ手応えを生徒が感じ取っているからだと思っています。

課題や小テストを減らしても、アウトプット活動を充実させても、前向きに学習に取り組む生徒は、大学入試でも成果を収めるはずだと信じています。

＊ 全国から集った若手教師が自身の教育活動について報告したり、様々な教育課題について語り合ったりしているオンライン・コミュニティ。同コミュニティの取り組みの詳細は、本誌2025年4月号P.18～21で紹介。